榧 KaYa

vol.06

亜細亜大学
国際関係学部編集

国際関係・多文化
フォトジャーナル

KaYa 06 亜細亜大学国際関係学部

ISSN 2188-3122

Asia University Faculty of International Relations

榧 KaYa vol.06

国際関係・多文化フォトジャーナル
Faculty of International Relations, Asia University

Contents

ESSAY
04 プーチン・ロシアの選挙風景
永綱 憲悟

銅像よもやま話6
10 群像
高山 陽子

ゼミナール紹介
18 「One for All,All for One」
福嶋 崇

ゼミナール課外活動
22 ラオスゼミ合宿
──ルアンパバーン世界遺産区に生きる人びととその暮らし
大塚 直樹＋ゼミ生

フィールドワーク
30 体験で学ぶ地球環境論
外来植物除去於井の頭公園など
中野 達司

学部行事報告
38 2018年度 多文化コミュニケーション学科アジア祭展示
──アクティブラーニングの試み
大塚 直樹

榧（かや）とは

亜細亜大学内のゆうちょ銀行ATMの裏側に記念樹があります。それが榧の木です。この記念樹は、1941（昭和16）年の本学創立当初に植樹されました。先達に敬意を表わしつつ、半世紀以上にわたり本学の歩みを見守ってきた榧とともにグローバル化時代に挑戦してゆこうという国際関係学部の思いが本ジャーナル名の由来です。

亜細亜大学　国際関係学部
〒180-8629　東京都武蔵野市境5-24-10

学部についての詳細は
http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/

『榧』はPDFデータでも閲覧いただけます。
※亜細亜大学学術リポジトリから入手できます。

ESSAY

プーチン・ロシアの選挙風景

永綱憲悟

はじめに

カラフルな、そしてかなり甘そうな菓子パンがたくさん並んでいる（写真1）。あるいはアコーディオンに合わせて歌う男性歌手がいる（写真2）。これはロシア大統領選挙の典型的な投票所風景である。ロシア国民にとって、投票は政治的権利でもあり、また市民的義務（法的義務ではない）でもあり、そして日常生活にいろどりをそえるイヴェントでもある。そんなロシア大統領選挙風景をざっとスケッチすること、それがこのエッセイの目的である。

1.大統領選挙投票所に並ぶ菓子パン

あらかじめ選挙結果を確認しておく。ロシア大統領プーチンは二〇〇〇年以来四度の大統領選挙を闘い、そのすべてに勝利して来た。とくに二〇一八年には有権者総数の半数以上の支持を得るという圧倒的な勝利を収めた（五ページ表参照）。筆者はこの四度の選挙のうち、二〇〇四年にはロシアNGOに参加し正式に選挙監視を行い、一二年と一八年には、個人的に選挙状況の視察を行った。以下、一八年選挙を中心に記述を行うが、そのさい一般的背景はインターファックス（http://www.interfax.ru/）ほかのニュースサイトに主として依拠している（詳細は『国際関係紀要』ほか掲載の筆者の研究論文を参照されたい）。また写真はすべて筆者の撮影である。

表 プーチン時代の大統領選挙

年(月／日)	勝者	投票率(%)	得票率(%)	絶対得票率(%)
2000年(3/26)	プーチン	68.6	52.9	36.3
2004年(3/14)	プーチン	64.3	71.3	45.8
2008年(3/2)	メドヴェージェフ	69.7	70.3	49.0
2012年(3/4)	プーチン	65.3	63.6	41.5
2018年(3/18)	プーチン	67.5	76.7	51.8

出典：ロシア中央選挙委員会の公式サイト(http://www.cikrf.ru/)

一．立候補と登録

どの国の選挙でもそうであるが、表立った選挙運動の前に立候補者登録というプロセスがある。日本の衆議院選挙（小選挙区）の場合、供託金三〇〇万円を用意できれば、ほぼ誰でも（日本国民で二五歳以上であれば）立候補し、正式に登録される。

だが、ロシアの大統領選挙では、正式に候補者となるまでにかなりのハードルがある。といっても、アメリカのように、政党の正式候補となるために、長期にわたる予備選挙が行われるわけではない。ロシアでは議会下院（国家会議）に議席を有する政党（二〇一八年には四政党）は、党大会を開催し比較的容易に候補者を擁立できる。一八年選挙では二政党からそれぞれ候補が擁立された。

一方、議会に議席を持たない政党は、一〇万人分の署名を集めなければならない。さらに、政党によらずに独立候補者として立候補する場合は、三〇万人分の署名が必要である（以上は、二〇一八年時点での選挙法規定による）。一八年選挙では、プーチンは、特定政党に依拠しないという姿勢をとり、独立候補者として出馬し、短期間で一五〇万を超える署名を集め、正式候補者として登録された。

ここでは「お金（供託金）」ではなく、人々の支持（署名）で立候補できる

2.大統領選挙投票所前で歌う男性歌手

というタテマエがとられている。だがプーチンが署名集めに要した費用は四〇〇万ルーブル（約七五〇万円）を超えていた。そしてこの費用は、日本の供託金と異なり、一定数得票で返却されるものではない。どちらが、より「お金」に依拠しているか、判断に迷うところである。

また登録のさいには本人及び家族の資産報告が求められ、海外の銀行口座は解約しなければならない。一八年選挙では共産党候補のスイス口座閉鎖が遅れ、いくらか物議をかもした（結果的には立候補は容認された）。

さらに一八年選挙では、プーチン反対の先頭に立ってきた反体制ブロガー、A・ナヴァリヌィが早くから立候補を表明し、全国的な運動を展開してきていた。だが、ナヴァリヌィは二〇一三年に横領容疑で執行猶予付き判決（欧州人権裁判所はこの判決を不当なものとしたが、ロシア裁判所は再度有罪の判決を下した）を受けており、選挙法規定により登録受け付けを拒否された。ナヴァリヌィは選挙ボイコットを訴えることとなった（写真3）。

一八年選挙では最終的に立候補登録者数はプーチンを含めて八名となった。投票一ヵ月前の世論調査では、プーチンへの投票意向が七割を超えているのに対し、他七人のどの候補者も一割以下の支持しかえられなかった。このため「プーチンと七人の小人」と揶揄されることとなった。

3.立候補を拒否された候補者が選挙のボイコットを訴えるビラ

二、選挙運動

日本の選挙運動のイメージは、おそらく候補者写真の並んだ看板と「〇〇をお願いしまーす」という選挙カーの往来であろう。ロシアの選挙にはそうした看板も選挙カーもない。それでも二〇〇四年の大統領選挙では候補者の写真ビラを散見することができた（写真4）。だが二〇一八年にはそうしたビラもほぼ皆無であった。大統領選挙は二〇〇〇年以来、まだ雪の残る三月に実施されており

4.ロシアでは珍しい立候補者のビラ（2004年）

5.TV討論の模様

戸外には人影は少なく、広大な地域を車で走って名前を連呼しても、ほぼ無意味である。このため運動はおおむね屋内での集会やサブ・リーダーたちとの交渉が基本となる。また各地の知事たちは自分の地域でのプーチン得票率がいわば査定対象になるゆえ、公立の学校や病院への公式非公式の働きかけを行う。

したがって、外国からの訪問者が各候補者の選挙運動を実感する機会は乏しい。ただし、TV討論はある（写真5）。ところが肝心のプーチンは、二〇〇〇年以来四回の選挙で、そうした討論に参加したことは一度もない。現職として実績を評価してもらえばよい、というのが公式の説明だ。しかし、対等な場での議論を回避するというのが本当の目的のようにみえる。討論は、一般の政治家たちがやることであり、大統領たるものはそうした企画には参加せず超然としているということである。

実際、プーチン抜きのTV討論で候補者たちは互いを罵り合い、時にはつかみ合い、水をかけあっていた。そうした候補者に投票したくはないと誰もが思うようになる。したがってTV討論に「参加しない」というのは、立派な選挙運動となる。

三、投票呼び掛け

プーチン時代の大統領選挙の二〇一二年までの投票率の平均は約六七％であった。一八年選挙でプーチン周辺は、

6.モスクワの街のいたる所にある投票呼びかけ掲示

8.スーパーのレシートにも投票の呼びかけ

7.カフェに置かれた投票呼びかけチラシ

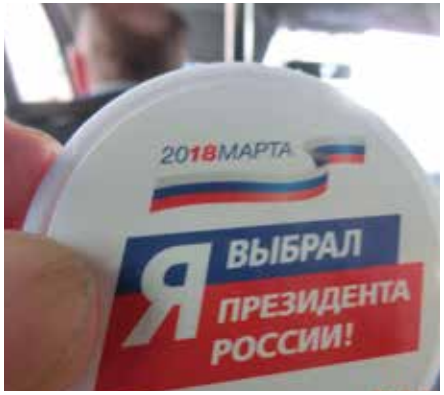
「七〇・七〇」、つまり投票率七割、得票率七割という目標を立てたといわれる。しかし二〇一六年の議会下院（国家会議）選挙投票率は過去最低の四七・八％であった。このためプーチン陣営も、また中央選挙委員会も投票率引き上げに躍起となり、大々的なキャンペーンを行った。モスクワの街のいたるところに投票呼び掛け掲示があり（写真6）、カフェにはチラシが置かれ（写真7）、スーパーのレシートにも呼びかけがあり（写真8／ちなみにこのレシートは投票日以降割引券として使える）、地区選挙委員会は戸別訪問で投票を呼びかけた。テレビ以外では候補者や陣営の人々の姿は見えず、彼らの公約の相違もあまり明らかではない。だが投票の呼びかけだけが街を覆うという様相である。

四. 投票日

投票は朝八時から夜八時まで実施される。冒頭で述べたように投票所での安価な食料品販売やミニ演奏会は以前からの慣習である。一八年選挙で新たに登場したのは投票所の場所を示す頑丈な案内板である（写真9）。また投票所には、日本と同じく、小学校があてられることが多いが、今回、モスクワの投票所では、中に警官がいて金属探知機チェックを行っていた（知人のロシア人談）。そして受付では身分証明書（国内パスポート）を提示し、本人確認後、投票用紙を受け取る（写真10）。また二〇一二年選

9.2018年に登場した投票所を示す案内板

10.入場管理が厳重な投票所



11.投票を終えた人に与えられるバッジ

挙からは投票箱上方にテレビカメラも導入された（画像はネット経由で誰でもリアルタイムで確認できる）。これだけ厳重にチェックしながらも――大規模な不正はなかったが――同一人物の複数回投票などの違反が指摘された（日本では、監視カメラはおろか、本人確認もろくに行わないが、不正投票はごく稀である。この違いはどこからくるのだろう）。投票が終えたのち、「投票した」というバッジが与えられることもある（写真11）。集計の一部は、自動式で行われているが、手作業での確認がなお主流である。ただ、むろん、正式集計発表前に、出口調査の結果が出て、プーチン圧勝が報じられることとなる。

おわりに

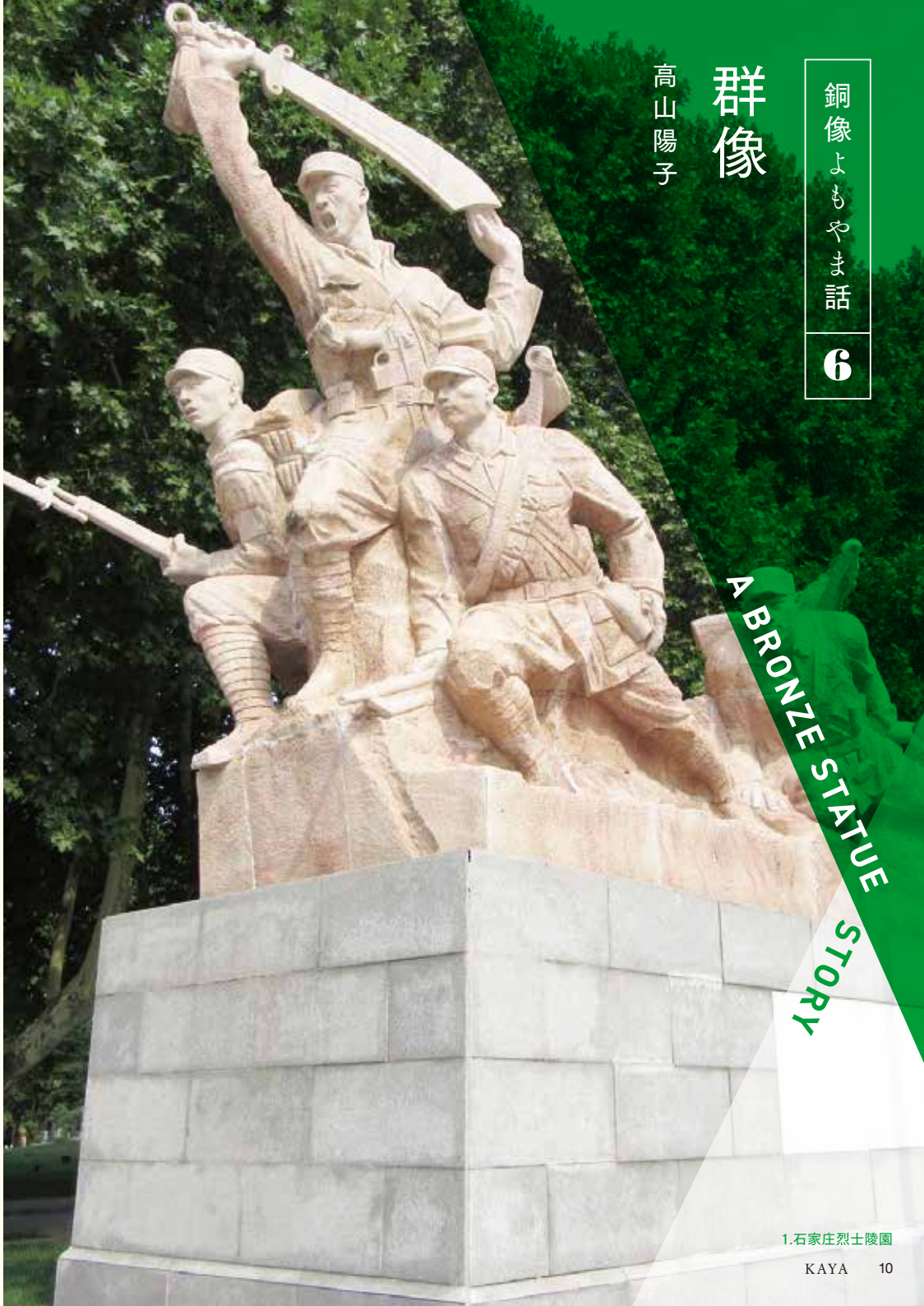
以上、立候補から、登録、運動、投票までのプロセスをざっと眺めて来た。選挙の教科書的イメージは、候補者が政策を掲げて競い、有権者が選択するというものである。だが選挙は、現政権（権力者）が自己の支配を正当化するために、あらゆる手段を用いて（ただし露骨な不正を避けながら）、有権者（被支配者）を政権支持に向けて動員するプロセスとも捉えられる。メディアも対立候補者も、選挙監視でさえもその中に組み込まれる。カラフルでおいしそうな菓子パンも投票バッジもその動員プロセスの小道具となる。そうした現象はどこの国でも見られることだが、現在のロシアにおいてはいっそう顕著な形で表れている。かくしてプーチン・ロシアの選挙風景とは、政権による国民の政治動員光景でもあるといえるであろう。

銅像よもやま話 6

群像

高山陽子

A BRONZE STATUE STORY



1.石家庄烈士陵園

銅像には、偉人や英雄一人からなる単体モノと、複数の人物からなる集団モノがある（写真1）（写真2）。特に専門的な名称があるわけではないので、ここでは後者を群像と呼ぶ。

群像に好まれるテーマは、連帯性を重視する戦争や集団労働である。兵士の群像として筆頭に上がるのは、アーリントン国立墓地公園の隣にある合衆国海兵隊記念碑（通称、硫黄島メモリアル）であろう（写真3）。これは一七七五年以降に死去した海兵隊員を顕彰するため、

2.瀋陽烈士陵園

3.合衆国海兵隊記念碑（通称、硫黄島メモリアル）

一九五四年に建立された。太平洋戦争の激戦地となった硫黄島の擂鉢山に、六人の海兵隊員が星条旗を立てた写真をもとに作成された。そのため、海兵隊員全体への顕彰碑というよりも硫黄島の戦いを記念したように見なされる。

この群像を作ったオーストリア人のフェリックス・ド・ウェルドンは後にクアラルンプールの国立記念碑の制作も手掛けた（写真4）。一九六六年に完成した世界最大級の国立記念碑は、クアラルンプールの観光名所の一つとなっている。台座には「自由と平和のために戦った勇敢な戦士たちにささげる」と英語とアラビア語で記されている。これは、マレーシアが共産主義ゲリラとの戦いに勝利したことを意味する。群像を構成する七名の兵士は、それぞれ、勇気、犠牲、リーダーシップ、強さ、苦痛、結束、警戒を表す。

二つの群像は、躍動感があると同時に建造物としての安定感もある。それはこの二つが三角形を基盤としていることに起因する。下に行くにつれて地面と接する面が増大するため安定感が増すのである。

躍動感を三角の形状で表す群像は、中国の国共内戦（解放戦争）の勝利を記念する博物館や資料館の定番の銅像である。江西省南昌の八一起義記念館前の群像（写真5）は、一九二七年八月一日、中国共産党がはじめて起こした武装蜂起を記念する。一九四五年八月の日中戦争終結後、国民党と共産党の争いが再発する。共産党が勝利し、国民党からその場所の統治権を奪ったことを現代中国では「解放」と呼ぶ。内戦は何年にもおよび、「解放」された日は都市によって異なるため、各地にそれぞれ解放記念碑がある。

国共内戦の三大戦役における最初の戦役は、一九四八年九月から一一月にかけて長春と瀋陽で展開された遼瀋戦役であり、林彪の指揮する東北野戦軍が五〇万の国民党軍を破った。これによって錦州、長春、瀋陽が「解放」される（写真6）。続く淮海戦役（一九四八年一一月

5.南昌八一起義記念館前

6.東北解放記念碑

4.クアラルンプール国立記念碑

～一九四九年一月）では、六〇万の人民解放軍が徐州付近に布陣する国民党軍の主力八〇万を殲滅する。平津戦役（一九四八年一一月～一九四九年一月）では、一九四九年一月二五日、東北野戦軍が天津を「解放」し、さらに北京を守備していた溥作義を説得して北京を無血開城させる。三大戦役はここで終わるが、渡江戦役（一九四九年四月～五月）で、南京をはじめとする長江南の諸都市が「解放」される。さらに南部の広州の「解放」は一〇月一四日、重慶の「解放」は一一月三〇日と続く。

7.広州解放記念

広州の「解放」一〇年を記念して設置された解放記念碑（写真7）には、台座に「一九四九年一〇月一四日　広州解放紀念　葉剣英」と刻まれている。中国諸都市に解放記念碑があるが、こうした単体モノは例外的で、多くは写真6のような記念塔の形をしている。

8.淮海戦役記念碑

名もなき兵士たちの群像がある一方、領袖たちの群像も見られる。写真8は徐州の淮海戦役記念塔公園の中にある「淮海戦役前総委群彫」という群像である。一九九七年に建立されたこの群像は、総前線委員会の五名を表している。左から粟裕、鄧小平、劉伯承、陳毅、譚震林であり、この並びは南京渡江戦役記念館前にある群像「渡江戦役総前委」（写真9）も同じである。

「鄧矮子」（チビの鄧）と呼ばれた鄧小平は、身長が一五〇センチほどであった。一九〇四年に四川省広安県に生まれ、一六歳でフランスに留学し、パリで反帝国主義運動に従事した。帰国後は、ゲリラ活動に携わり、一九二九年、広西で百色蜂起を起こして右江ソヴィエトを作る。長征を経て、八路軍の三大主力師団の一つ、一二九師の政治委員（政治的任務担当、「政委」と略される）となって、司令員の劉伯承を補佐し続ける。一二九師は国共内戦時に第二野戦軍に編成され、劉伯承と鄧小平の名前をとって「劉鄧」と呼ばれた。

9.渡江戦役記念館前

淮海戦役の指揮を執った粟裕は、華東野戦軍（後の第三野戦軍）の副司令員であった。華東野戦軍の司令員兼政治委員は陳毅、第一副政治委員は譚震林であった。第三野戦軍も、第二野戦軍と同様に「陳粟」と呼ばれていた。「劉鄧」と「陳粟」という司令員と政治委員の名コンビが人民解放軍に勝利をもたらした。

10.西柏坡記念館前

「劉鄧」、「陳粟」以外にも五人組の群像がある。写真10は西柏坡にある「五大書記」の群像（左から周恩来・劉少奇・毛沢東・朱徳・任弼時）、写真11は平津戦役記念館にある「五大書記」の群像（左から周恩来、朱徳、毛沢東、劉少奇、任弼時）である。一九四八年五月、共産党は党中央と解放軍総本部を河北省石家庄の北にある山村に置き、三大戦役

11.平津戦役記念館入口

に備えた。西柏坡の「五大書記」の銅像の前には「新中国はここから来た」と書かれている。また、写真12は八一起義記念館前の群像で、左から劉伯承、葉挺、周恩来、賀龍、朱徳と並んでいる。これらゴレンジャー的群像は、二一世紀になってから登場したものである。かつての毛沢東像（写真13）や、前のめり兵士の群像（写真2）（写真5）とは別種の銅像である。毛沢東像一辺倒の時代、すなわち、文化大革命の時期には、領袖らの群像は設置不可能であった。なぜならば、群像に登場する領袖たちの多くが、政治の表舞台から姿を消していたためである。

12.南昌八一起義記念館前

13.済南毛沢東像

一九六八年の第八期一二中全会（中国共産党第八期中央委員会第一二回全体会議）で劉少奇は党を除名され、鄧小平は全職務を剥奪された。その後、劉少奇は紅衛兵による激しい攻撃を受けて、一九六九年一〇月に死去した。鄧小平は、南昌で三年に及ぶ軟禁生活を送った。陳毅や粟裕も批判にさらされ、閑職に追いやられた。最後まで紅衛兵の批判に屈しなかった陳毅は、一九七二年に死去した。その追悼会に際して鄧小平は復活するが、第一次天安門事件で再び失脚する。

他方、早くに亡くなった葉挺と任弼時は「烈士」（革命英雄）として称えられ、立派な墓に埋葬されている。任弼時の墓（写真14）がある北京の八宝山革命公墓は、党幹部が埋葬される格の高い公共墓地であり、位置づけはアーリントン国立墓地公園に近い。ここは昔から墓地として使われていたが、一九五〇年、四七歳で病死した任弼時の墓が置かれたことから、神聖な革命烈士墓となった。また、葉挺は墜落死した一九四六年四月八日の日付をとって「四八烈士」と称される。

一般的に、肖像画や銅像は、その人が最も輝いていた時期の顔が選ばれる。また群像は、その出来事の中で最も輝いていた一場面が選ばれる。その場合、選ぶのは本人ではなく、同時代の人びと、または、後の時代の人びとであり、その基準はしばしば政治的である。したがって銅像になった人びとが、「この表情はイヤだ！」とか「この場面はイヤだ！」、さらには「こいつの隣はイヤだ！」と思っている可能性も十分に考えられるのである。こうした妄想は銅像を見る楽しみの一つでもある。

14.任弼時の墓

ゼミナール紹介

Seminar introduction

「One for All, All for One」

福嶋　崇

正式には「福嶋ゼミ」という名前のゼミは存在しない。例えば二〇一八年現在の四年生ゼミ（総合ゼミ）の正式名称は、「宗像・安藤・只野・中川・峯岸・南・指田・松本・冨田・乗原・立石・安川・八矢・中嶋・並木・陸・張・福嶋ゼミ」、略して「福嶋ゼミ」である。

福嶋ゼミは面白いですか？ という学生からの質問には「答えられない」としか言えない。なぜならそのゼミを作るのはゼミに所属するメンバー全員であって、一人一人が面白いゼミ、意欲的なゼミ、学べるゼミを作っていく気があるかにかかっているからである。もちろん「一メンバー」としての教員という役割を担う福嶋の影響力は大きい。そこに面白さがあり、難しさがあり、充実感があり、無力感がある。毎年が、毎月が、毎日が勉強である。

これが福嶋ゼミの基本方針であることから、ゼミのルール・目標もメンバーである学生が決める。毎学期初回の講義時に教員は教室から退出し、学生のみでその学期のゼミのルール・目標を話しあうことになる。全員一致を原則とし、以降は教員という役割を担う福嶋がゼミのルールの管理者として振る舞うことになる。それゆえ、学生同士の話し合いの結果として「ゼミ開始後三〇分後までは遅刻とはしない」、「提出期限は一週間オーバーまでは認められる」というルールが設定されることもありうる。幸いにもそのようなルールが設定されたことはまだないが、それを良しとするのであれば教員は何も口出しをしない。

福嶋ゼミで行われるイベントとして、ゼミ旅行を紹介したい。一人一人が旅行先を考え、企画した内容を三分間でプレゼンする。そして、プランの魅力や予算を検討したうえで全員の投票によって旅行先を決める。決定後、宿泊先の予約なども含めて、学生の中から選ばれたゼミ旅行係を中心にゼミ生全員で全てを進めていくため、企画自体がとん挫することもありえる。残念ではあるが、学生が決めたことであれば教員もやはりそれに従うのみである。

二〇一八年九月、三年生ゼミ（専門ゼミ）でのゼミ旅行は、学生らしく低予算での一泊二日のキャンプ、行き先は東京都西多摩郡奥多摩町にあるアメリカキャンプ村であった。「食べることが大好き」なゼミ旅行係リーダーらしく、メインとなる企画は三班に分かれてお題となる各国の様々な料理を作る、というものであった。

楽しいのT!!…ではなく福嶋崇のTのようです

河原でBBQ!「神スイング」で肉をひっくり返します

各班五、六名と少人数のチームであったことからゼミメンバー同士の仲も深まり、また実は料理の得意なメンバーが大活躍するなど、手作りのとても楽しいゼミ旅行になった。また、ここに掲載されている写真は、写真を趣味とするゼミ生が自身の一眼レフ・三脚などを持参し、自身の特技を活かしてゼミ生全員のためにとってくれた思い出深い一枚一枚である。

最後に、福嶋ゼミでは三・四年生ゼミより、それまでのさん付けの名字呼びをやめ、下の名前で呼び合うようになる。特に二年次後期のアメリカ留学の際には下の名前で呼び合うという文化を体験してくる学生にとっては比較的すんなりと受け入れられるようである（もちろん下の名前で呼ばれることを望まない学生がいれば、その希望は当然優先される）。ただし、下の名前で呼ぶのは単に親しみの表現ではない。むしろ本当の意味は、教員として学生を「611〇-〇〇〇（学籍番号を意味する）の〇〇さん」としてではなく、福嶋崇が〇〇を一人前の、大人として扱うよ、という明確な意思の表現である。本当はこのことを二年間一緒に過ごした四年生の最後のゼミの日に学生に伝える。どうしよう、書いてしまった。どうか福嶋ゼミ生にはこの原稿を読まないで二年間を過ごしてほしい。

福嶋ゼミは、それぞれが自身の個性を最大限に発揮しあってみんなで作る、大人のチームなのである…といいなぁ。

各班に分かれての調理

みんなでフリスビーをしたり、水鉄砲を打ちあったり

ナシゴレン、パエリア、リゾット…料理が完成!いよいよ実食!!

extracurricular activities

ラオスゼミ合宿

——ルアンパバーン世界遺産区に生きる人びととその暮らし

大塚直樹＋ゼミ生

extracurricular activities

二〇一八年度を含め過去三年間、総合ゼミ（四年ゼミ）では夏期休暇中にラオスでのゼミ合宿を実施している。担当者の本学着任初年度はベトナムのホイアンとホーチミン市、翌二年間は台北でのゼミ合宿をおこなっていた。初年度は当時の履修学生の希望を受け入れる形で（担当教員のフィールドでもある）ベトナムでのゼミ合宿をおこなった。二年目以降は、以下のような教員側のコンセプトを取り入れる形で対象地を決定した。まずは観光地形成とそこで暮らす人びとの関係を知る機会を提供する、そうした観光地において学生たちに主体的学びの場を用意する、最後に学生時代にしか経験できないであろう「旅行」を供する、という三点である。

紙幅の関係上、台北からルアンパバーンにゼミ合宿の訪問先を変更した詳しい理由は省くが、上記のコンセプトに合致するような行き先を、一連の手配を依頼している旅行業者にも相談しつつ模索した結果、近年はルアンパバーン世界遺産区を訪問している。

なお、ゼミ合宿実施前、二〇一六年二月～三月にルアンパバーンを事前調査した。

ゼミ合宿の内容は以下の通りである。すなわち、ラオスにあるルアンパバーン世界遺産区を訪問し、そこで生活する人びとの暮らしを知り、世界遺産というブランド化と地域社会との相

互作用を考察する。具体的には、世界遺産登録によって居住空間が観光地化するなかで、現地の人びとが観光産業にどのように関わるようになったのか、生活変化がみられるのかを現地体験を通じて理解する。また、現地を訪問する観光客（特に欧米諸国・東アジア圏）との交流から、彼ら／彼女らの異文化へのまなざしを把握する。また、参加学生には訪問先の基本情報を調べる事前課題を出して、それを現地で報告してもらっている。

今年度は二〇一八年八月二六日～三一日（四泊六日）の日程で実施した。

二〇一八年度ゼミ合宿の日程

初日：原則移動日であった。学生たちは成田空港のベトナム航空のカウンターでチェックインし、ハノイのノイバイ空港で航空機の乗り換えをおこなった。今年度から担当教員はノイバイ空港で合流することにした。この点は、学生たちのみでトランジットを体験してもらうという、主体的な学びの一環でもある。とくに往路について、ハノイ―ルアンパバーン間がラオス航空（コードシェア便）であり、成田空港では航空券がハノイまでしか発券されない。したがって、ノイバイ空港のトランジットカウンターでルアンパバーンまでの航空券を発券する必要がある。こうした手続きを学生たちのみ体験することも貴重であろうと判断した。蛇足であるが、ハノイ―ルアンパバーン間はATR72双発旅客機が運用されている。飛行中に窓から常に陸地がみえる体験はプロペラ機ならではであろう。

ルアンパバーン空港からは現地ガイド付きの専用車でホテルまで移動した。チェックインを終えた後、ホテル周辺を散策した後、その日は早めに解散した。

二日目：ルアンパバーン世界遺産区の主要な構成要素にもなっている寺院・博物館を中心に約半日をかけて巡検をおこなった。ワットシェントーン、ワットマイ、ワットビスンナラートなどの上座部仏教の寺院をめぐり、建物の壁画に込められた神話やかつての王と寺院の関係などを現地ガイドから学んだ。さらに、男性の出家や僧侶の待遇など日本社会のなかではあまりなじみのない宗教実践について解説を受けることで異文化の社会動態を目の当たりにすることができた。その他にも王宮博物館、モン市場なども見学した。

前述の空港からの専用車に現地ガイドをつけていることを含め、二日目・三日目にガイド手配をしている点は「世界遺産に暮らす人びとの生活を知る」というコンセプトに基づいている。ルアンパバーンの街は、必ずしも観光ガイドを依頼しなくとも充実した体験が可能である。ガイド手配は、街全体が世界遺産に指定されている空間において、生計を立てる一手段としての観光ガイドの役割を理解してほしいという考えに基づいている。また、三年次に継続的に実施しているゼミ合宿「プーケットでのランドオペレーター研修」での体験を「実際に体験してみる」という担当教員の（隠れた）意図もある（三年ゼミ合宿の内容は『榧』第三号を参照）。さらに、夕方以降に出現する路上市場を見学することで観光産業と生計手段との関連性を学ぶことができた。

三日目：パクウー洞窟を訪問した。パクウー洞窟には車でもアクセスできるものの、毎回メコン河をボートで往復している。大陸河川の広大さを目の当たりにするとともに、生活に密接した河川を肌で感じてもらうことを目的にこのルートを採用している。洞窟へ向かう途中、酒造りの村（バン・サンハイ）に立ち寄った。現地ガイドの説明によれば、この地域ではかつて酒造りのみをおこなっていたが、観光客の増加とともに、刺繍をし、それを販売するなどの生業が増えたとのことであった。ここでは観光客の出現によって変化したであろう村のローカルな実践を観察できた。

四日目：この日は早朝にみられる托鉢を観察した。袈裟を着た僧侶が一列になって托鉢する姿は壮観であり、二日目に巡検した上座部仏教の僧侶の具体的な修行の一端を垣間見ることができた。同時に、現地の人びとに混ざり、観光客が托鉢に参加している様子が観察でき宗教実践と観光地化との相互関係も学ぶことができた。その後は、グループによる自由行動とした。担当教員としては、この時間を使い、現地の人びとや観光客に簡単なインタビュー調査などをしてもらいたいと考えている。ただし、基本的には学生の意思を尊重して、グループ行動を前提とした自由時間としている。

五日目：この日は、夕方のフライトで帰国するため、原則として自由行動にしている。夕方にホテルを出発し、ルアンパバーン空港から往路と同様にハノイ経由で深夜便にて翌朝成田空港に到着した。

このゼミ合宿では、全日程を通じて可能な範囲で学生と一緒に食事をとるようにしている。ラオスの食文化は、モチ米や米の麺を中心としており、日本ではあまりみられないような食材も多く使われている。本ゼミ合宿では、多様な食の世界を実体験することも目的としており、できるだけラオス料理（ないしルアンパバーン料理）の店を選び、学生と食事をともにした。

最後に今回参加した三名のゼミ生の体験談を掲載して本稿を閉じたい。教員側の意図が反映された異文化経験となっているかどうか、その点は読者の判断に委ねたい。

ラオスという国は、さまざまな文化が混淆していることが特徴の不思議な国でした。周辺のタイやベトナム文化が少しずつ融合していて、様々な文化や食を味わうことができました。その中でも印象的だったのが、私たちが滞在したルアンパバーンには多くの上座部仏教のお寺が存在していたことです。寺院では、現地の信者の方が参拝をしており、私たちもガイドの方に教わりながら実際にお参りをしました。参拝することによってルアンパバーンに根付いている上座部仏教を自らの身で感じることができ、神聖な気持ちになりました。（佐藤 未波）

voice of the student

この写真はナイトマーケットの様子を撮影したものです。食べ物から衣類、お土産など様々なものがテントのなかにズラリと並べられており、日本では見かけることのない光景だったので新鮮でした。昨年の夏にベトナムのホーチミン市を訪れたときには、観光客だとわかると、ものを押し売りされ、その場から立ち去ることも難しかったのに対して、ルアンパバーンではそういったことは一切なく、気持ちよく街を散策することが出来ました。

（長谷川 彩乃）

今回、ゼミ合宿でラオスのルアンパバーンに約一週間滞在しました。ルアンパバーンは街全体が世界遺産に登録されていると聞いて、期待大で行ったのですが、その期待を超えた満足感いっぱいで帰国したような気がします。今まで東南アジアでは、タイのプーケットとベトナムへ行きましたが、断トツで好きな国でした。街中にある装飾豊かな寺院では、現地の宗教のことも学べました。また、朝早く起きて托鉢も見に行けたのもいい経験になったと思います。写真のプーシーの丘はメコン川と世界遺産の街を同時に見渡せて絶景でした。「ラオスのどこが良かったの？」と聞かれてもうまく答えられないのですが、本当に良かったです！行ったことのある人にしか分からない良さが、ラオスにありました。また絶対行きたい国です！

（大野 萌子）

voice of the student

Field work

体験で学ぶ 地球環境論

中野達司

外来植物除去於井の頭公園など

平成二四年度開講の当科目は野外活動として、初年度から行なっている富士山麓でのゴミ処理活動「富士山清掃」に加え、翌年度からは井の頭池（武蔵野市、井の頭公園内）での外来生物駆除も行なってきている。

先ず「富士山清掃」であるが、今年度も五月二七日にNPO法人「富士山クラブ」の活動に参加するという形で野口健客員教授の指導の下、五〇名の学生が参加し実施された（写真2）。初年度と翌年度は山梨県側の青木ヶ原樹海に業者によって捨てられ、埋められた産業廃棄物を掘り出し、一昨年度、昨年度は富士市大淵地区の道路沿いの林内の、車からポイ捨てされたと思われるゴミを拾い、処理した。今年度は過去二年と同じ静岡県側の富士市大淵地区ながら道路沿いではなく、三〇年前にリゾート開発が着手され、やがて計画放棄された土地に残された廃棄物の処理を行なった。（資料1、回収物一覧）

Field work

今年度の活動は、作業場所に古タイヤが多く、それを掘り出し、こびり付いた泥を除去し、他の回収物ともども輸送車のある所までの数百メートルを担いで運ぶなど、重労働であったが、学生の働きは目覚ましかった（写真3、4）。この日の活動については『毎日新聞』静岡版（二〇一八年五月二八日朝刊）で報じられ、さらに関連することが同紙全国版（二〇一八年八月七日）で取りあげられた。参加した学生は報告書を作成し、七月四日の授業時に報告会（学内外公開）が実施された。

優しい富士山を子どもたちに残していくために～ 富士山クラブ

2018年5月27日 亜細亜大学国際関係学部 「体験から学ぶ地球環境論」
清掃活動成果 （富士山クラブ調べ）

品目	個数	備考
<自動車関連ごみ>		
タイヤ	56	内2輪用4本
その他自動車部品	1	フロントグリル
シート	多数	[illegible]
<家庭ごみ>		
テレビ	2	
石油ストーブ	1	
電子レンジ	1	
<事業系ごみ>		
鉄くず	多数	
<危険物>		
乾電池	2	
スプレー缶	1	
<可燃ごみ>		
紙、プラ、ゴム等内容物は多様	15	45リットル袋
<資源ごみ>		
ペットボトル	0	45リットル袋
空缶	2	45リットル袋
金属ごみ	8	45リットル袋
<埋立ごみ>		
ビン・ガラス、陶磁物類	3	土嚢袋

回収ごみ総重量 790 kg

活動エリア番号 I19

清掃活動参加者 50 名

活動エリア 静岡県富士市大淵地区 国道469号線沿い林道

回収ごみ処分協力 富士市廃棄物対策課
富士市環境クリーンセンター

その他協力 富士宮市 富士山環境交流プラザ

資料1

3

外来生物駆除は平成二五年度に野外活動として組み入れ、井の頭池（武蔵野市）で外来種の駆除活動を行なうこととなり、従来より井の頭公園の生態系保全活動を行なってこられた「井の頭かんさつ会」（代表：田中利秋さん）の活動に加わらせていただいてきており、昨年度までブルーギル（魚類）やアメリカザリガニ（甲殻類）といった外来動物を駆除してきた。（写真5、6は昨年度の活動模様）

井の頭池にはかつては上記のブルーギルやブラックバスなどの外来動物が繁殖し、在来生物の生存を脅かすなど、その存在は由々しきものであった。そのような状況への対処で「かいぼり」（掻い掘り、池の水を抜くこと）が本年二月までに三回実施され、外来動物の駆除が行なわれてきた。二回目のかいぼりでブラックバスは根絶され、さらに本年の実施でブルーギルも一匹もいなくなったと見られている。即ち、水圏の外来動物の状況は大いに改善されているようなのである。

それで本年度の駆除活動は陸に上がり、外来植物の除去を行なうこととなった。四月二一日（土）、同二八日（土）の午前中に、昨年度までの水圏での活動同様「井の頭かんさつ会」にご指導いただき実施した。受講者は全員、何れかの日に参加している。両日とも好天に恵まれ、正味二時間の野外作業に従事した。主たる駆除対象はトキワツユクサ（ノハカタカラクサ）という南米原産の外来種で（写真7）、その白い花は可憐ながら、はびこっては他の植物の生育を妨げる厄介な外来植物であり、環境省の要注意外来生物に指定されている。

作業に先立ち「井の頭かんさつ会」の田中代表から、駆除対象（トキワツユクサ）、作業手順などの説明を受け（写真8）、作業開始。トキワツユクサは繁殖力が強く、除去したつもりで

4

5

6

7

8

も根の一部が残っていれば生えてくる代物なので、その除去には完璧さが求められる。学生は自分の担当のエリアを決め、移植ごてを用いて、完璧な除去に挑んだ。作業の合間に他の外来種（アメリカオニアザミ等）の紹介などを聞くこともあり、また近くの者と談笑しながら、学生は日頃は縁のないことと思われる土が相手の仕事に勤しんだ。（写真9、四月二一日、写真10、四月二八日）一つの場所での除去活動終了後、自分の作業成果である除去したトキワツユクサのつまった袋とともに記念撮影。（写真1、四月二一日）。

その後、正味二時間の作業を終了し、使用した道具類を水で洗い、集合写真におさまり、正午過ぎに解散した。（写真11、12、13、何れも四月二八日）

以下はこの活動に参加した受講者（多文化コミュニケーション学科3年生、小川千恵子さん）の感想である。

9

10

11

12

四月二一日の授業で、井の頭かんさつ会の方とともに、井の頭恩賜公園で、外来種駆除を行なった。井の頭かんさつ会の皆さんは、井の頭公園で自然観察会を行なうとともに、環境保全活動も行なっている。今回は外来植物であるトキワツユクサの除去を行なった。

トキワツユクサは、南アメリカ原産だが、園芸種として世界各地に持ち込まれた。葉は一年中緑で艶があり、夏になると白い花が咲き、見ている分にはかわいらしい植物である。しかし、繁殖力がとても強い植物でもある。茎を這わせて地面を覆ってしまうため、他の植物が生えることができない。かんさつ会のレポートによると、トキワツユクサの繁殖力により、枯死寸前となったツツジもあった。トキワツユクサが地面を覆い、光を遮ってしまうためである。

駆除する際に気を付けなければいけない点は二つある。一つは、茎が非常に柔らかいという点だ。トキワツユクサは繁殖力が強いため、駆除する際には根元から除去しなければならない。しかし、茎が柔らかく切れやすいため、丁寧に作業しなければ茎がちぎれてしまい、地面の中に根や茎が残ってしまう。少しでも残っていると、そこから再び繁殖をしてしまう。この性質のおかげで、実際の作業はとても大変だった。茎は柔らかく、深くまで繁殖しているため、根元から完全に除去することは難しい。そのため、完全駆除には一年から三年かかり、作業には根気が必要である。二つ目の点は、似ている植物がいくつかあるということだ。今回、除去する対象になったのはトキワツユクサの種子をつくるタイプとつくらないタイプの両方である。トキワツユクサは在来種のツユクサと比べて、葉が厚く艶がある。種子をつくらないタイプは、全体が緑色だが、種子をつくるタイプは、茎や葉の裏が紫

色になっている。これらによく似ている植物が、在来種のツユクサである。この場合、葉に艶がない。そのため、葉を見比べて、区別しながら作業を行う必要がある。他にもヤブミョウガやチヂミザサも似ているが駆除対象にはならない、ヤブミョウガは葉が大きく、茎も少し太かった。チヂミザサは葉が波打っており、毛が生えていることが特徴である。

井の頭公園ではこの他に、アメリカオニアザミやワルナスビといった外来植物が繁殖している。アメリカオニアザミはヨーロッパ原産、ワルナスビはアメリカ合衆国南部原産であり、どちらも繁殖力が強い。一方で、日本固有の保護植物も生えている。ジュウニヒトエ、キランソウ、オトコエシなどである。ジュウニヒトエは、草丈を伸ばせる環境が減ったこと、キランソウは草刈りや人による踏み付けで近年数を減らしている。

今回の体験で、外来生物の駆除はとても根気の必要な作業だと痛感した。自分の作業エリアをきれいにして、達成感に浸っても、立ち上がり周りを見渡すと、まだ多くのトキワツユクサが生えており、途方に暮れる気持ちになった。私たちは、井の頭公園やその他の公園などで、植物を見て、なんとなく自然と触れ合い、共存している気分になりがちである。しかし、植物をはじめ、その他の生き物は、人間を喜ばせるために存在しているのではない。そのことを深く感じることができた。（おがわちえこ）

掲載写真の2、3、4は亜細亜大学広報課川北加代子さん撮影。それ以外は筆者撮影。
資料1は認定特定非営利活動法人富士山クラブ提供。

12

学部行事報告

2018年度　多文化コミュニケーション学科アジア祭展示
――アクティブラーニングの試み

大塚直樹

学科としてアジア祭に参加しはじめて今年度で五回目を迎えた。今年度は「多文化のおうち」を展示テーマに設定した。過去のテーマを振り返ると、「市場」「祭礼」「食文化」「観光」であり、社会生活の基盤を衣食住と捉えるとするならば、今年度のテーマが住居となったのは必然かもしれない。一見ユーモアを感じさせるテーマかもしれないが、展示内容は学科の地域言語（韓国語・中国語・インドネシア語・ヒンディー語・アラビア語・スペイン語）に基づいた学術的な展示になった。

各地の住まいやそれを取り巻く環境は、一方でその地域の自然環境に左右され、他方で民族創世神話などと結びつき、独特の空間をつくりだす。社会空間の均質化が指摘されて久しいが、その土地に根ざした居住空間も多くみられる。社会関係が織りなす生活空間は、グローバルな状況を受け入れ／に飲み込まれつつも、ローカルな実践とともに構築される。今回の展示では、地域言語に基づいて、それぞれのエリアに特徴的な住居空間を再現しようと試みた。

韓国ブースでは韓屋の模型を展示した（写真1）。人びとの所属階層により建築様式が異なっており、被支配者層が住んでいたわらぶき屋根の住居（チョガジプ）、および支配層の両班が居住していた瓦屋根の住居（キワジプ）をあわせて再現した。

1.韓国ブース

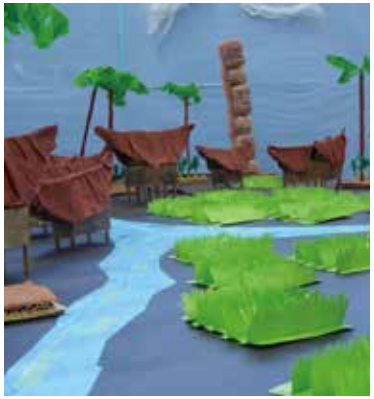
中国ブースでは四合院を再現した（写真2）。四合院は、東西南北に四棟を配置して、中央の中庭を取り囲む形式が基本である。北京を中心にして広く中国北部に分布し、地域的なバリエーションがあるものの、建物の南側に外に開かれた門をもつ構造になっている。

東南アジアブースでは、インドネシア、スマトラ島のトバ・バタック族の住居を再現した（写真3）。高床式住居で、屋根が馬に取り付ける鞍の形をした独特の外観（鞍形切妻屋根）を持つ。また破風が大きく前後にせり出している。一般的には住居棟と米倉が平行に配置されている。

南アジアのブースでは、インド西部グジャラート州に住むメグワル族の住居の模型を展示した（写真4）。メグワル族の住居は壁面が円筒の形をしている。ただし、段ボール素材から円筒をつくることは難しいため、教室の壁面を利用して半円のみの模型を作成する工夫を凝らした。

中東のブースでは、イエメンのサヌアの街並みを再現した（写真5）。サヌア旧市街は四～一〇階建ての塔状住居が林

2.中国ブース


3.東南アジア（インドネシア）ブース

4.南アジア（インド）ブース

5.中東ブース

立する景観をなす。建物の構造は、下層階に店舗や家畜小屋、倉庫などがあり、上層階が居住空間になっている。居住空間には応接間・客間も配する。ブースでは、同時にサヌアの南側に位置するイエメン門の模型も展示した。

中南米のブースでは、グアナフアトの街並みを再現した（写真6）。グアナフアトは、一九八八年に「古都グアナフアトとその銀鉱群」として世界遺産（文化遺産）に登録された。街並みは、一八世紀を中心にしたバロック様式の歴史的建造物であり、複数の聖堂も残されている。そこで、メキシコでは約九〇％がカトリック教を信仰していることにつなげ合わせて、教会のステンドグラスや内装の模型も展示した。

それぞれのブースでは、地域言語を履修している学生を中心にして、可能な範囲で来訪者への展示説明をおこなった（写真7）。

昨年度までの展示物を利用した「野菜市場」「屋台で多文化」は、とくに子どもから人気があった。文化祭の制約上、その場で作ってもらうことは難しいが、紙粘土でつくられた展示物を実際に触れてみる楽しさが評価を受けたようである（写真8）。また、恒例となった「なまえで多文化」のコーナーも引き続き盛況であった。ブースを設置し、地域言語のうち、韓国語・ヒンディー語・アラビア語で参観者の名前を書く試みである（写真9）。原則として当該言語を履修している学生が対応した。こうした取り組みは、言語履修学生の成果公表の場になるとともに、参観者との会話が生まれることから、前述の学生による展示解説だけでなく、一方通行になりがちな展示空間を双方向性に変化させる可能性をもっている。言い換えれば、アクティブラーニングの実践とも捉えうる。

最後に、今年度の多文化コミュニケーション学科の展示「多文化のおうち」は、後夜祭にて「第一四世ダライラマ法王猊下来学記念杯」を授与された（写真10・11）。優れた海外研究の発表と評価されての受賞であった。昨年度の展示部門優秀賞に続いて、二年連続の受賞であった。学生の主体的な学びが着実にこうした結果に表れている。

6.中南米ブース

7.展示を解説する学生

8.野菜を手に取る参観者（子ども）

9.なまえで多文化

10.展示撤収後の記念撮影

11.プラカードと第14世ダライラマ法王猊下来学記念杯

読書案内

布野修司編『世界住居誌』昭和堂、2005年。

執筆者紹介（五十音順）

大塚 直樹（おおつか なおき）
国際関係学部多文化コミュニケーション学科・准教授。主な担当科目は、観光地理総論、フィールドワーク入門。

中野 達司（なかの たつし）
国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。主な担当科目は、体験で学ぶ地球環境論、中南米の社会と文化。

高山 陽子（たかやま ようこ）
国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。主な担当科目は、世界遺産論、テーマパーク論。

福嶋 崇（ふくしま たかし）
国際関係学部国際関係学科・准教授。主な研究分野は、環境政策学、地域研究。

永綱 憲悟（ながつな けんご）
国際関係学部国際関係学科・教授。
主な研究分野は、現代ロシア政治。

榧 KaYa 国際関係・多文化フォトジャーナル vol.06

2019年 3月31日発行
発行：亜細亜大学国際関係研究所
制作：株式会社キンデル

問い合わせ先
亜細亜大学国際関係学部
〒180-8629 東京都武蔵野市境5-24-10
http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/

本雑誌記事の無断転写を禁じます。
©2019 Faculty of International Relations, Asia University